

資質・能力を育てる音楽科授業の在り方に関する一考察
—音楽表現へ生かす汎用的な能力の育成の視点から—

A consideration on the way of music classes to fostering competencies and capabilities
:From the viewpoint of fostering generic ability to make use of musical expressions

藤澤 克彦¹ ・ 松永 洋介²

FUJISAWA, Katsuhiko ・ MATSUNAGA, Yousuke

1. 研究の目的

平成 29 年に新しい学習指導要領（以下、新指導要領）が告示された。この新指導要領では、これからの時代を担う子供たちに求める学力観が、コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへと変化したということが特徴としてあげられる。これに伴い、評価の観点も、従来の「関心・意欲」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」「鑑賞の能力」から、新しく目標として示された 3 つの観点に準拠することが予想される。すなわち「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」である。

しかし、新しい学力観に基づく教育課程の構想はそれよりも前から行われてきている。音楽科では、それまで十分意識されているとは言えなかった指導内容を、平成 20 年告示の第 8 次学習指導要領からは〔共通事項〕として示した。これは、歌唱、器楽、創作、鑑賞の各活動の支えとなるものである。岐阜大学教育学部附属中学校においては、表現及び鑑賞の各活動と〔共通事項〕とを関連させて指導することが十分に定着してきているように思われる。〔共通事項〕に基づいた指導を行うことにより、授業内で生徒が何を学ぶかが明確になり、課題解決に向けた学習活動も生徒にとって分かりやすいものになってきた。実際、授業中の生徒の様子を見ても、「なるほど」「分かった」「すごいな」といった声が多く見られるようになった。また、「もっと表現したい」「もっと聴きたい」といった声も多く聞かれ、学習活動がスマートになったことにより、学びに対する意欲も向上していきいていると考えられる。

ただその反面、音楽や楽曲のもつ本来のよさについて、生徒はどのように感じているのだろうかとの疑問が生まれてきた。〔共通事項〕を意識しすぎるあまり、「音楽を形づくっている諸要素で何を教えるのか」ということに過敏になりすぎてしまい、音楽や楽曲のもつ本来の良さについて感じ取ることが希薄になってきてはいないだろうかということが問題意識として上がってきた。

音楽の授業である以上、学習内容の定着を図ることは当然のことである。しかし、音楽そのものに対して、さらなる憧れや情熱、理解を深めたときに生まれる感動を生徒が味わえるようにすることも重要である。本研究では、そのための方策を明らかにすることを目的とする。

2. 岐阜大学教育学部附属中学校における研究テーマ設定について

(1) 今日的な課題からの視点

時代の流れとともに教育を取り巻く環境も変化してきている。2009 年にアメリカでは、「21 世紀

¹ 多治見市立多治見中学校（前岐阜大学教育学部附属中学校）

² 岐阜大学教育学部音楽教育講座

型スキルの学びと評価プロジェクト」(ATC21S)によって「21世紀型スキル」が提唱されている。また、日本においても諸外国の教育課程を研究した結果として「21世紀型能力」が提唱された³。これらは、日本の学習指導要領の理念である「生きる力」を獲得することにつながることを意識している。「21世紀型能力」で提唱されているスキルの中には様々なものがあるが、音楽科の授業とこれらのスキルのつながりについて、今後の研究で考えて行く必要があることは言うまでもない。

(2) 岐阜大学教育学部附属中学校におけるこれまでの研究からの視点

岐阜大学教育学部附属中学校音楽科における平成26年度までの研究では、研究主題を「音楽を総合的にとらえる音楽科教育」と設定し、取り組んできた。その研究内容及び研究に関わる具体的方途は次の通りである。

まず、研究内容は「(1) 音楽科の学習における汎用的な能力の整理」と「(2) 汎用的な能力を生かし、音楽表現につなげていくための具体的方途」の2つが設定された。次いで、(2)の具体的な方途として「汎用的な能力を明確にした指導計画の作成」と「音楽表現につなげるための教師の手立て」が設定された⁴。

これらのテーマを設定した研究実践によって次のような成果と課題が得られた。

まず、成果としては2点ある。一つは、音楽の学習における汎用的な能力を整理したことにより、一単位時間の授業の中でどのような汎用的な能力を育てていくことができるかの見当をつけることができたことである。二つ目には、汎用的な能力を意図的に生かすような教師の手立てを仕組むことで、生徒は音楽表現に対しての評価を自然に行えたことである。そしてその評価から、自分たちの表現(歌唱表現、言語表現等)を批判的な思考でとらえ、再表現に生かそうとする姿がみられたことである。一方、課題としては、生徒に育てたい汎用的な能力をより明らかにし、一単位時間での授業だけでなく、題材を通しての資質・能力の育成を検証していく必要があることが明らかになってきた。

以上の成果と課題を踏まえて、平成27年度は「研究主題を資質・能力を育てる音楽科授業の在り方」と研究テーマとして掲げた。そしてサブテーマを「～音楽表現へ生かす汎用的な能力の育成～」とした。

3. 願う生徒の姿

岐阜大学教育学部附属中学校音楽科では願う生徒の姿を次のようにとらえている。すなわち、要素の働きを知覚しその特質や雰囲気を感じ取る経験を活かし、音楽の良さを再認識したり表現を深めたりしようとする生徒、である。

音楽をより豊かに表現しようとするとき、音楽経験がその基盤となっていることは言うまでもない。これまでの研究の中で、要素や要素同士の働きを知覚することは、学習内容を明確にすることによって、意識化された感受につながるようになってきた。このような経験を積み重ねることで音楽的な経験値は積み重なり、どのような工夫をするのか思考したり判断したりすることで、音楽の良さを再認識したり、表現を深めたりする姿につながっていくと考えた。

4. 研究仮説の設定

3で述べた生徒像に迫るために、平成27年度は次のような研究仮説を掲げ研究に取り組んだ。

³ 勝野頼彦編(2013)『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則(教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5)』国立教育政策研究所

⁴ 研究の詳細については、『岐阜大学教育学部附属中学校研究紀要』(2014)ならびに『岐阜大学教育学部附属中学校中間研究報告』(2015)に詳しい。

それは、生徒が自分の表現をさらによりよいものにしていこうとするとき、生徒は自分の表現を振り返る。このときの自己評価を的確にとらえ、これまでに培ってきた音楽経験から思考判断を繰り返す、的確な表現の工夫を生み出すことができれば、音楽の良さを多面的に感じたり、表現を深めたりしていくことができるであろう、という予想である。

研究仮説の具体を掲げる前に、「音楽の学習における汎用的な能力の整理」を示す。(図1)

21世紀型スキルに対応した音楽科の学習における汎用的な能力の整理			
21世紀型スキルに対応するカテゴリー			
思考の方法			働く方法
スキル 創造性とイノベーション	問題解決・意思決定	メタ認知	コラボレーション チームワーク
思いや意図をもとにして、創意工夫を説明したり洗練したり分析したりする。また、新しく創り出そうとする。	思いや意図に近づくための表現にするためには、どのような創意工夫を用いればよいかを考え、表現への見通しをたてる。	自分の表現を聴いたり振り返ったりする活動を通して、批判的な思考で振り返る。	他との音楽的な関わりを理解し、音楽全体を把握しながら自分の役割について考え、表現につなげる。 (アンサンブル等)

図1 21世紀型スキルに対応した音楽科の学習における汎用的な能力の整理

研究仮説内で示した「自己評価を的確にとらえ」は、思考の方法にある「メタ認知」に関わってくる部分である。また、「これまでに培ってきた音楽経験から思考判断を繰り返す」は、「創造性とイノベーション」、「問題解決・意思決定」に関わってくる部分である。さらに「音楽の良さを多面的に感じたり、表現を深めたりしていく」は、コラボレーションに関わってくる部分である。この研究仮説を逆の発想で考えれば、次のように言えると考えられる。

すなわち、的確な「メタ認知」をもとにし、「問題解決・意思決定」能力を駆使し、「創造性」を生み出すことが、音楽表現の創意工夫を生み出すことにつながる。さらに、他との音楽との関わり（「コラボレーション」）を見出すことで、よりよい音楽表現につなげていくことができる、ということである。

5. 研究実践

4で述べた研究仮説を実証するために、次のような研究内容を考え実践した。

(1) 研究内容1 「題材において身に付けたい汎用的な能力を示した指導計画の作成」

題材指導計画を作成するときに、意図的にその題材を通して身に付けさせたい汎用的な能力を掲げることにする。学習活動を展開していく中で、学習のねらいにそった指導とともに、汎用的な能力を育てることができるように指導を重ねていく。例を掲げるとすれば、次のような題材計画が考えられるであろう。

学年は第1学年であり、題材は、リズム創作「ラップでCMをつくろう」である。ねらいとしたのは、「身につくことができる汎用的な能力」である。

実践の概要を以下に示す。

グループ学習を主体とする。題材を通して、グループでひとつの作品（ラップを用いたコマーシャル）を作り、それを発表する活動を展開していく。グループで一つの作品を手掛けるということで、リズムパターンや歌詞（言葉）の取捨選択をするときには、仲間同士での関わりが必要になってくる。グループでよりよい表現を追求していくために、グループ内での協働的な学びを深めていくことで、コラボレーションの汎用的な能力を身に付けていく。

(2) 研究内容2 「一単位時間における汎用的な能力を生かした教師の指導の在り方」

一単位時間内において、汎用的な能力を生かした授業になるように2つの具体的方途を設定して試みた。

① 具体的方途1 「汎用的な能力を育てるための授業デザイン」

ここでは、音楽科の授業の中のどのような場面において、汎用的な能力が発揮されていくのか、その状況と場面について考える。

i) メタ認知

メタ認知は自己評価につながる部分が多い。そのためにも、メタ認知の能力を育成するためには、自己評価力をより高めていくことができることが望ましいと考える。

自己評価力を高めるためには、自分の表現を的確に捉えたり、仲間との交流を通して自分の考えを振り返ったりすることが必要である。それに加え、自分がこれまで知らなかった知識や理解を伴うことで、この力はさらにつけていくことができると考える。つまり、その生徒がこれまで理解していなかった音楽を捉える視点を教師が与えることによって、よりの確なメタ認知に近づいていくと考える。

育成することができる授業場面としては、課題提示の場や授業終末におけるアセスメントの場が適していると考えられる。

ii) 問題解決・意思決定

音楽の授業の中で問題解決・意思決定をする場面は、自分の思いや願いにあった表現に近づくために、どのような表現の工夫を用いるかを決定するとき等が考えられる。この力を育てていくためには、自分の思いや意図を表出したり、どのような表現の創意工夫を試みたりしていくのか考えていくことがつながる。

自分の思いや意図を表出したり、どのような表現の創意工夫を試みたりするためには、これまでに培ってきた音楽の知識・理解をもとにして、根拠のある判断をしていかななくてはならない。そのためにも、生徒の音楽経験や既習事項を想起することができる指導・援助が大切である。この指導・援助をすることで、生徒の意思決定への自信にもつながり、問題解決・意思決定をしていこうとする気持ちにつながっていくと考える。

iii) 創造性とイノベーション

新たなものを創りあげようとするとき、小さな成功と頻繁な失敗を繰り返すことによって、新しい考え方や多様な考え方が生まれてくる。様々な考え方の可能性を信じ、繰り返し取り組むことが大切になる。

例えば、思いや意図にあった表現に近づくために表現の創意工夫をしているが、なかなか自分の思う表現にならない場面があったとする。そのときに、いろいろなアイデアを出し創意工夫を続けたり、自分の出したアイデアを練り直したりするとき、この汎用的な能力が育成していくことができると考える。

全体や小集団活動で表現した後の交流の場においては、その価値についてフィードバックすることも可能になるため、よりよく身に付いていくことができると考える。

iv) コラボレーション, チームワーク

コラボレーションやチームワークは、他者と効果的に相互作用をしたり、効果的な働きをしたりする能力である。だからこそ、他との関わりのある活動が多ければ多いほど、この能力の育成につながっていくであろう。

具体的に音楽の授業の場面で考えると、小集団（グループ）活動の中で、音楽表現を創り出していくときにこの力を育成することができると思う。

② 具体的方途2「音楽表現につなげるための教師の手立て」

身に付いた汎用的な能力を音楽表現につなげるために、学習活動において意図的な言葉かけを行った。表現に対する指導援助であるが、汎用的な能力につながっていくような意図的な言葉を選ぶことが必要である。以下に各目的別にそれぞれの言葉かけの例を示す。

(ア) メタ認知の能力を育成するために

例1「今試した表現は、考えた創意工夫が活かされていたらどうか」

例2「自己評価と仲間の評価を比較してみて、どのような評価の差があるだろうか。また、その根拠はなんだろうか」

例3「〇〇の諸要素に着目して工夫をしてみたね。でも、△△の諸要素に着目してみるとどうだろうか」

(イ) 問題解決・意思決定の能力を育成するために

例1「楽譜のこの場所を根拠として、創意工夫を創り出したのかな」

例2「前に学習した部分を振り返ってみよう。〇〇の良さは△△ということだったね」

例3「〇〇の諸要素をこのように工夫すると、□□のような効果が生まれてきたね。この特徴を生かしていけないだろうか」

(ウ) 創造性とイノベーションの能力を育成するために

例1「よりたくさんアイデアを出してみよう。その中にぴったりくる創意工夫があるかもしれない」

例2「たくさんアイデアの中から、どれが一番自分の意図に合う表現になっていくだろうか」
(考えの精査)

例3「もう一度さっきと同じ表現をしてみて、もっと楽しくできそうな部分を見つけてみよう」
(創造的に考える)

(エ) コラボレーション, チームワークの能力を育成するために

例1「発表に向けて、グループでの目標や計画を綿密に立てるようにしよう」(プロジェクトの運営)

例2「自分たち以外のパートの音を聴いてみよう。どんな動きをしているのか、理解してみよう」
(相互作用の理解)

例3「グループの仲間全員の意見を聞いて、その中から自分たちの表現に適したものを見つけてみよう」(効果的な働き)

以上のような具体的方途を重ねることによって、授業内で意図的に汎用的な能力を育てていくことができると思う。

一方、授業での振り返りの場において、メタ認知を促すとともに音楽表現を振り返るために、アセスメントシートの工夫をすることも欠かせない要素であろう。

6. 終わりに

平成28年8月26日付で、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会における「次期学習

指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が報告された⁵。この中では、音楽科で目指す資質・能力が小学校、中学校、高等学校別に整理されている⁶。それらは「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」をもとに設定されている(図2)。例えば、中学校における「思考力・判断力・表現力等」には、次のような記述がある。すなわち「音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出すこと」というものである。

音楽科、芸術科(音楽)において育成を目指す資質・能力の整理

	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
201 中学校 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽の多様性などの音楽文化について理解することや、音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること <li style="text-align: right;">など ・自分なりに音楽表現を創意工夫したり、思いや意図を音楽で表現したりするための技能を身に付けること <li style="text-align: right;">など 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に対する感性を働かせ、<u>音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出すこと</u> <li style="text-align: right;">など ・音楽に対する感性を働かせ、<u>音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知識を得たり活用したりして、音楽を自分なりに解釈したり、音楽と人々の暮らしなどとの関連から音楽を捉えたり、自分にとっての価値を考えたりし、よさや美しさを味わい、音楽の意味や価値を生み出すこと</u> <li style="text-align: right;">など 	<ul style="list-style-type: none"> ・音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る感性 ・協働して音楽活動する喜びの自覚 ・音楽の学習に主体的に取り組む態度 ・音楽を愛好する心情 ・音環境への関心 ・音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度 ・我が国の音楽文化への愛着や、諸外国の様々な音楽に関わる態度 ・美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心としての情操 <li style="text-align: right;">など

下線部は、現行の学習指導要領で示している【共通事項】と関連する箇所

図2 音楽科、芸術科(音楽)において育成を目指す資質・能力の整理(中学校)

音楽表現を創意工夫してどのように表すかについて、思いや意図を生み出すためには、創造的に考える力が必要である。そのためには、様々な価値あるものに触れることで、アイデアを精選したり、新しいアイデアを見出すことができたりする力が必要である。これからの時代を生き抜くためには、どの教科にもつながり、社会に出ても通じる力を身に付けていくことが必要である。音楽の資質・能力を育てるためにも、汎用的な能力の育成は推進をしていく必要があるのではないだろうか。

参考文献

⁵ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」平成28年8月26日付

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm (2018.1. 3閲覧)

⁶ 同上資料第2部(算数、数学、理科、高等学校の数学・理科にわたる探究科目、生活、音楽、芸術(音楽))

www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_4.pdf (2018.1. 3閲覧)

- 伊野義博 (2014) 「中学校音楽科における成果と課題」『中等教育資料』平成 26 年 7 月号
- Griffin, Patrick. McGaw, Barry. & Care, Esther. 著, 三宅なほみ監訳 (2014) 『21 世紀型スキル：学びと評価の新たなかたち』, 北大路書房
- 北山敦康 (2015) 「高等学校学習指導要領実施上の課題とその改善 (音楽)」『中等教育資料』平成 27 年 8 月号, 東洋館出版社
- 岐阜大学教育学部附属中学校 (2014) 『研究報告』
- 岐阜大学教育学部附属中学校 (2015) 『中間研究報告』
- 国立教育政策研究所 (2013) 『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5』
- 国立教育政策研究所 (2014) 『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 7』
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2012) 『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校音楽)』, 教育出版
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2016) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」平成 28 年 8 月 26 日
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』, 教育芸術社

